

わいぐ WA~IGU

わいぐ
「WAIGU」は、青森県南部地方の方言である南部弁の「私、行く（わあ行く）」という方言が元になっています。地域の課題に対して、市民が自主的に取り組む姿を、この一言に表しました。



～安藤昌益資料館を育てる会～

江戸時代中期の町医者・安藤昌益は、秋田県大館市生まれ。飢饉が頻発した八戸で暮らし、封建時代の中、男女平等・人間と自然との共生・農業の大切さを説きました。その著作や関連資料を集めたのが、八戸市八日町にある「安藤昌益資料館」。今年で開館 10 周年を迎えます。

資料館の1階には、代表作「自然真営道」や「八戸藩日記」などの資料を展示していて、これらはデジタル技術を使ったコピーで、実際に手に取って読むことが可能です。また、2階には、DVD 視聴コーナーや関連資料が幅広く揃っています。

「八戸にこんなすごい人がいたんだ!」と知ること、このまちがもっと好きになるはず。気軽に遊びにきてくださいね。

お問い合わせ：安藤昌益資料館

● TEL 090 (2886) 8109 ● 休館日 月曜・火曜・水曜 ● 開館時間 11 時～16 時

も く じ

- ★特集 わいぐ交流会 2018..... 2 P
- ★わいぐコラム・わいぐライブラリ..... 3 P
- ★WA~IGU情報..... 4 P

特集

わいぐ交流会 2018

2018年12月9日(日)、八戸市総合福祉会館にて「みんなで創ろう住みよいまち～世代をつなぐ市民活動」をテーマに「わいぐ交流会」を開催しました。交流会実行委員長である、「はちのへ女性まちづくり塾生の会」の慶長洋子さんのあいさつに始まり、「八戸さんぽマイスター」と「特定非営利活動法人みちのく国際日本語教育センター」の2団体に活動事例発表をしていただきました。

また、今回のお楽しみ企画は南部昔コキャラバン隊による、「南部昔コ(昔話)」と「わらべうた」。初めて聞く「南部昔コ」や、昔懐かしい「わらべうた」に笑顔ほころぶひと時となりました。その後は「みんなで創ろう住みよいまち」のテーマでテーブルトークを行いました。「私たちの住むまちをよりよくしたい」という思いが一つになり、様々な意見が交わされました。



慶長実行委員長のあいさつ



八戸さんぽマイスターの活動発表



特定非営利活動法人みちのく国際日本語教育センターの活動発表

参加者の声

たくさんの団体があることが分かった。

参加者の声

他の団体の色々な話が聞けて良かった。

参加者の声

南部昔コもわらべうたも懐かしく、とても楽しかったです！

参加者の声

活動の内容を聞いてとても感心しました。

参加者の声

活力あふれるみなさんに元気をもらいました！



南部昔コキャラバン隊とわらべうたで手あそび



グループトークの様子

【わいぐ交流会テーブルトーク（テーマ：「みんなで創ろう住みよいまち」）のまとめより】

◆若い人々が活動できるまち・住めるまち（子育てしやすいまち・子育て世代への支援策の充実など）◆生活者の目線でまちを作ろう（行政も小さな声に耳を傾けて！・互いに協力しあい「住みたい」まちを作ろう）◆後継者・仲間を増やしていく。◆安心して住める地域づくり（密なコミュニティづくり）◆町内会会員を増やすために、まずは子ども会を活性化させる。◆地域をより深く知るために、年配の方々と交流機会を増やす。……その他たくさんの意見が交わされました。



※交流会へご参加のみなさん、ありがとうございました！

わいぐの木

出番です！シニア世代

8

ペンネーム：北のおじさん

誌面ナンバー 67号で「平成時代」が終わり、次号から新元号に入る。そこで勝手に平成を総括してみると、印象として強く残っているのは三陸はるか沖地震、阪神淡路大震災に始まる大災害の歴史。この後、有珠山、三宅島噴火、中越、熊本、大阪地震。更に水害など。極めつけは東日本大震災で行方不明、死者数で1万8千人を超えた。これは地震発生による大津波だった。福島原発、北海道のブラックアウトも衝撃的災害で、今後の日本を考える上で大きな教訓となった。

これらの教訓を生かし、次世代にも伝えたいことは「各種ボランティア活動のネットワーク構築」。社会活動の仲間が日頃から連携を深めることで、色々なアイデアや、提案も生まれ、事に即して助け合うこともできよう。「遠い親戚より身近な他人」という諺は、今

も生きている。

特に近年は、かつて経験したことのない、超高齢者社会。反面、少子化という次世代が減少する課題も抱えている。分かりやすくいえば、「動けなくなった年寄り」を、少ない若者で支えなければならない。現実を考えれば、暗い未来の様にも思われるが、この課題を広い視野で捉えれば「外国人との融合」。更なる国際化推進が日本の未来を切り開くキーワードとなろう。その意味で大災害の多かった「平成時代」は、災害時「助け合い」の基本を確立した時代でもあったといえる。

インターネット、携帯、スマホ、SNSなどの急速な普及の基本活用は、緊急時の「情報伝達」「情報収集」にも役立つ。「ラジオ」「新聞」「テレビ」の果たす役割も大きい。



わいぐライブラリ

ワールド・カフェから始める 地域コミュニティづくり: 実践ガイド



出版元) 学芸出版社
著) 香取一昭・大川恒

今なぜ新しいコミュニティが求められているのか？日本の地域再生へ向けた21世紀型コミュニティづくりを、「ワールド・カフェ」という手法で実践するためのガイド本。

わいぐでは、市民活動に役立つ書籍を設置しております。スタッフのお勧めをご紹介します。

NPOのための マーケティング講座



出版元) 学芸出版社
著) 長浜 洋二

NPOが増加し、法制度が整うにつれて事業目的を遂行する実力が問われる時代になってきた。NPOマーケティングの基本と実務を豊富な事例をもとに解説した一冊。



【助成金情報】

公益財団法人みちのく・ふるさと貢献基金 2019年度 教育・福祉・環境助成事業

●助成対象団体

原則として1年以上の継続的、組織的活動実績のある個人、団体、NPO法人、企業等で助成金給付後、活動・研究報告書を提出できる団体等。ただし、次の団体等は対象外とする。

- (1)過去3年以内(2016年度以降)に当財団の助成金の交付を受けた団体等
- (2)政治活動又は宗教活動を目的とする団体等

●助成対象活動及び期間

2019年10月1日から2020年9月30日までに行われる活動で、次の(1)～(8)のいずれかに該当し、助成対象期間に他の助成を受けない活動(営利目的は対象外)

- (1)保健・医療・福祉又はそれに関連する活動
- (2)地域の自然科学に関する研究活動
- (3)地域の環境保護に関する活動
- (4)郷土の歴史や文化にかかわる調査・研究活動
- (5)高齢者への生活支援サービス活動
- (6)芸術・文化の育成、保存、伝承、啓発、発信等の活動
- (7)スポーツ競技力の向上や、生涯スポーツ普及に向けた活動
- (8)その他、目的に基づき適当と判断した活動

●助成対象費用

諸謝金(講師への謝金)、旅費(交通費・通送料等)、

消耗品費(文具・コピー用紙等)、通信運搬費(郵便料・通信費)、印刷製本費(チラシ・ポスター作成印刷等)、会議費(会議に伴う費用、会場借上げ代等)、賃借料(催し物等会場使用料、レンタル料金)、賃金(従事手当、アルバイト代等)、その他の費用(事業の特性から理事長が認める費用)

※申請団体等の管理費、応募した活動に直接関係のない費用は対象としない。

※以上の費用が全額助成金での計画は認めない。

●助成金額

必要費用以内で100万円を限度。選考において減額の場合あり。助成対象数は5～10件(予定)。

●応募方法

申請書に必要事項を記入の上、関係書類を添えて、応募期限までに簡易書留にて当財団事務局に送付。

●応募期間

2019年4月1日～6月30日 ※期限厳守

●書類の提出先及び問合せ先

〒030-8622 青森市勝田一丁目3番1号

公益財団法人みちのく・ふるさと貢献基金

TEL: 017-774-1179 FAX: 017-774-2591

URL: <http://www.michinoku-furusato.or.jp>

E-mail: kikin@michinoku-furusato.or.jp

※HPより応募要項と申請書をダウンロードできます。

紹介団体からの一言マメ知識!

— 安藤昌益が考えた、造語の数々。その中からいくつかご紹介します。 —

— 安藤昌益が考えた、造語の数々。その中からいくつかご紹介します。 —

○直耕(ちよっこう) 自然の循環の中で正しく農耕を行い、生活していくこと。男は穀物を耕し、女は麻を織り、このような人間の労働は永遠に絶えることがなく、人間の本来の生き方であるとする。

○互性(ごせい) 天と地、男と女、雄と雌などの関係をいう。本質的には同一だが、現れ方に違いがあり、お互いがお互いを活かし合って存在していることである。

○男女(ひと) 男と女がいて、はじめて一人の「ひと」となり人間になるということ。

男女を「ひと」と読ませ、江戸時代に男女平等をはっきりと唱えた記念碑的な言葉。

※安藤昌益資料館は、入館料300円で、スタッフによる資料説明付きです。

(小・中・高生は無料) 資料館というと堅苦しい印象がありますが、どなたでも、気軽に聞いてください。

